

スポーツと良心

——知・徳・体の調和を目指して

大学神学部教授・良心学研究センター長

小原克博
こはらかつひろ

5月13日、同志社礼拝堂で良心学研究センター主催の公開シンポジウム「スポーツと良心——知・徳・体の調和を目指して」が開催された。このシンポジウムを企画した背景には二つの事情があった。一つは、これに先立つ半年ほどの間に日本のスポーツ界において様々な不祥事が続き、スポーツ選手の倫理観が社会から厳しく問われていたことである。日々、心身を鍛練しているトップ・アスリートたちが、なぜ自制心を失い、薬物・賭博・暴力などに関わることになったのか。それは当事者の自己責任に帰するだけでは済まない、組織的そして社会的な問題を含んでいるはずである。

もう一つの事情は同志社に関係するものである。新島襄は知育と徳育の両立を重視しただけでなく、身体鍛錬にも力を入れ、初期の同志社には先駆的な体育の授業が取り入れられていた。後に、知・徳・体の調和ということが同志社教育の理念の一つに数えられるようになるが、現在、それはどのような実体を有しているのだろうか。中身を伴わない標語が繰り返されるだけでは、健全な教育の発展が望めないだけでなく、同志社ス

ポーツの行く末にも影響を及ぼすことになるだろう。

これまでスポーツ選手を招いて、その体験に耳を傾ける機会があったが、以上のような事情を直視し、同志社の良心教育とスポーツの関係を正面から見据える機会は決して多くなかったように思う。このような理由から、今回のシンポジウムでは「体」（スポーツ）に着目し、その現代的な課題、そして良心との接点を探っていくことにした。

まず、日本教育文化史の専門家であり、体育会ラグビー部長・体育会会長である沖田行司氏（社会学部教授）に、日本史における武道やスポーツの変遷と同志社における体育の位置づけに関して講演をしていただいた。沖田氏は本センターの研究員でもある。また、スポーツの一般論に終始せず、スポーツ界の事情に深く分け入るために、柔道のオリンピック・メダリストである溝口紀子氏（静岡文化芸術大学准教授、バルセロナ・オリンピック女子柔道52kg級銀メダリスト）にも話をいただいた。以下に二人の講師による講演内容のポイントを記す。

スポーツは良心を育てるか

沖田氏は、武道（武士道）から近代以降の体育、戦後教育とスポーツの関係に至るまでの歴史的経緯を話された。近代化の中で、武士という職業は消えても、森有礼、新渡戸稲造、新島襄ら留学した世代の中にも、その精神は引き継がれていった。新島の場合、忠誠心の対象が主君から神へと大きく変化したことは見逃せない。近代国家形成の一環として国民体育が普及していくが、国家主義的な時代の影響を受ける中で、かつて武士道に内在した倫理性は軽視され、国家に忠誠を尽くす精神が強調された。こうした構造は、戦後のスポーツにおいても、戦前の軍隊教育に似た、しごき、暴力、先輩への絶対服従として引き継がれていく。現代のスポーツ界における諸問題はこうした歴史的経緯と無関係ではない。勝利至上主義がこうした問題を見えなくしているという側面もある。

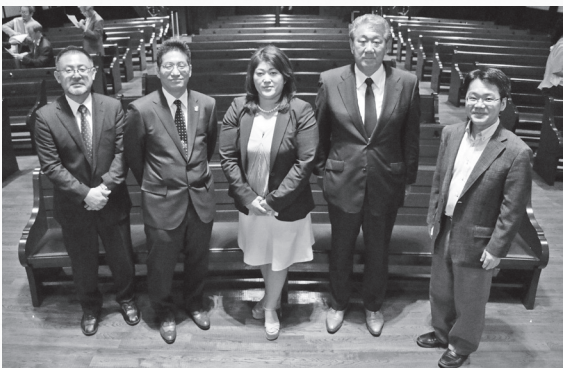
知・徳・体の有機的な結びつきが、富国強兵を中心とする近代化や、戦争の経験、戦後教育の中で、ほぼバラバラに解体され今に至っていることを顧みれば、良心教育の具体的な課題として「知・徳・体の調和」に取り組むことは、きわめてチャレンジングな現代的課題であることがわかる。

柔道と良心——組織の自浄能力を考える

溝口氏は、ご自身の柔道経験や、バルセロナ・オリンピックにおける銀メダル獲得に至るまでの経緯やその後の変化について言及されながら、柔道界における課題と現状をわかりやすく

話された。競技団体の自浄能力（良心）を高めるために、また、体罰の連鎖を止めるために何ができるのかを、中心的な課題として論じられた。15人の女性柔道家が慢性的な暴力問題やパワーハラスメントを全日本柔道連盟に告発し、問題が明るみになった「全柔連不祥事」（2013年）を具体的な事例として取りあげ、ジェンダーバイアス、男女格差、権力の問題がいかに組織の自浄能力を低下させてきたかが語られた。溝口氏はフランスで柔道コーチを務めておられ、その経験からくるスポーツの国際比較も示唆に富んだものであった。

二人の講演を受け、下楠昌哉氏（文学部教授、体育会柔道部部长）と石倉忠夫氏（スポーツ健康科学部教授）から、それぞれの専門と経験に即した有益なコメントをいただき、今後考え続けていくべき論点が整理されたのも幸いなことであった。本シンポジウムの詳細については良心学研究センターのウェブサイトをご覧いただきたい（<http://ryoshin.doshisha.ac.jp>）。



第12回ACジャパンCM学生賞にて 準グランプリBS民放賞と優秀賞を受賞

2016年3月28日、東京のサントリホールにて公益社団法人ACジャパンが主催するACジャパンCM学生賞の授賞式が開催され、女子大学情報メディア学科2年次生の3グループが、準グランプリBS民放賞（1作品）と優秀賞（2作品）を受賞した。これらの作品は、女子大学情報メディア学科2年次生対象の必修科目である情報メディア演習（森担当クラス）において、学生が取り組んでいる公共CM制作プロジェクトの成果である。

授業課題として取り組み始めて今年で5年目となるが、これまでも最優秀企画賞、優秀賞、奨励賞など、いくつかの賞を受けてきた。しかし今回の準グランプリの受賞は、これまでとは一線を画す快挙だと言える。なぜならこのコンペにおいて、グランプリと準グランプリのみ実際にテレビでの全国放映（BS民放）が行われるからである。学生というエクスキューズなしに、プロのCM作品と同等の扱いで、彼女たちの主張が、あ

るいは彼女たちの感性が、公共の電波に乗って広く社会に届けられるのだ。

受賞作品の表現力

準グランプリBS民放賞の受賞作『左ききの人』は、小松原舞、細矢千春、加嶋瞳、藤井亜沙美の4名による作品で、セクシャルマイノリティをテーマとしている。優秀賞受賞2作品のうち1作は、藪谷あゆみ、小林美晴、谷口晴花、梅田風香の4名による『刺青』。これはSNSにおける書き込みマナーをテーマとした作品。もう1作は櫻尾日奈子、三崎有希、足立千慈、今出ゆいの4名による『救急車』。こちらは救急車利用におけるマナー問題をテーマとした作品である。

それぞれに優れた表現性を有しているが、3作品に共通して評価できる点は、伝えたいテーマを直接的に伝えるのではなく、視聴者の興味や関心を引き出すエモーショナルなメッセージへと翻訳していることであろう。例えば『左ききの人』においては、『LGBTの人たちが身近にたくさんいる』ことを説明するのではなく、LGBTが左利きの人と同じくらい存在することをさりげなく伝えることによって、LGBTが実は身近な

存在であることが、実感を伴ったメッセージとして受け取れるのである。作品では、左利きの人物と右利きの人物をシメトリに配した安定感のある構図、登場人物たちの爽やかな笑顔、清潔感あふれる白を基調とした衣装や背景、やわらかく優しい口調の女性ナレーション、素朴で心地よい音楽などが全体として共鳴する。愛の多様性を認めようとする気持ち、美しく繊細に、かつ力強いメッセージとなつて響き、視聴者の共感を生むのである。

作品制作と学び

公共CM作品の制作は、単に専門的なスキルを身につけることを目的にしているのではない。作品を制作するプロセスには、社会意識、創造性、協働性、共感性、総括的に考える力などを育む契機が豊かに潜在しており、現代社会において必要とされる基礎的能力を身につけるための最適な教育プログラムであると考えられる。

例えば、初期のリサーチ段階では、社会における問題の情報収集からスタートし、学生自らが重要だと思ふ社会問題の発見とそのエビデンスの提示、共通する問題意識を持った学生同士でのディスカッションを行い、社会問題に対する自覚的態度を養う。

続くプレ・プロダクションの段階では、テーマを共感を得るためのメッセージへと翻訳し、映像、ナレーション、音楽、効果音などの具体的な表現アイデア（絵コンテ）へと置き換える創造的なプロセスを経験する。そして、出演者やナレーターなどの手配、ロケ現場の下見、撮影許可の獲得、制作管理、モチベーションの維持など、理想を現実へと落とし込む。プロダクションの段階においては撮影、演出、編集、美術、進行管理など

の役割分担を行い、それぞれの任務を遂行しつつ、相互に助け合いながら協働して制作に挑む。必ずならぬ挫折や失敗、不調が襲ってくる。その場合は、必要に応じてプロセスを遡る、強く交渉し説得する、何度も挑戦するなど、トライ＆エラーを厭わず進める。

こうした試行錯誤を経て、最後の仕上げとプレゼンテーションを行い、他者からの批評や評価を受ける。今回の準グランプリの受賞のように、高い評価を得ることができれば、広く社会全体に自分たちのメッセージを届けるチャンスにつながる。すなわち、社会を改良するための一助となることも可能だ。

このような総合的な教育プログラムは、新しい教養教育のあり方を示唆しないだろうか。学校教育の始まりから今日に至るまで、知を育む図書館（書物を中心とするアナログ系メディア）による情報集積機能）が教育の礎となり学びを支えてきた。この構造は、デジタルテクノロジー以降の現代において、創造性を育むためのメディア（情報の収集、分析、編集、表現などを支える多様なデジタル系メディア）に置き換わることで、その姿を変えつつあるのではないか。もしそうだとすれば、こうした創造性の涵養をキーコンセプトとした、教養教育の新しいカタチを探る道筋が開かれつつあるのかもしれない。



第12回ACジャパンCM学生賞表彰式

1. なぜアジアなのか

アジアものづくり授業交流プロジェクトと銘打って、アジア諸国の学校の教師や生徒をつなぎながら、ものづくりや科学技術の授業交流を行っています。ものづくりやビジネスの現場では既に国境を越えて展開され、共同開発や企業提携など例を挙げればきりがありません。これにならって、教育活動においても教師・生徒の両側面からの交流を実現しようとしたのが、本プロジェクトの出発点です。教師は国境を越えた教材開発や授業改善に向けた交流、そして生徒は科学・技術・文化・語学の交流の場として考えてきました。

またアジアに注目する理由は、将来的に中国、インドなどのアジア諸国の中間所得層の購買力の拡大¹⁾、経済力の成長が予測されており、日本の企業もますますアジア諸国での展開が期待されるからです。また時差が少なく移動コストを抑えられるだけでなく、多くのアジア諸国は英語で意思疎通が可能であるというの大きな利点でもありました。

2. 韓国・台湾の先生や子どもたちと力を合わせる授業

本プロジェクトはすでに韓国、台湾の私立学校と密接な関係を築いています。ソウルの名門大学の一つである慶熙大学の付属中学とは、筆者が訪問し授業をするだけでなく、有志の生徒とものづくりの授業交流を行っています。教師も国境を越えてチームティーチングで授業を行い、生徒たちもインターナショナルなベアになつて、教師から出される技術的課題に対してアイデアを交換し、手を動かしながらプロトタイプ²⁾の解決策を時間内に提案するという授業を行っています。例としては、橋梁技術の教授法として定評のある「ブリッジコンテスト」³⁾を中心に行っています。韓国と日本の生徒を一つのチームとして、橋の模型を製作する。決められたスパンと材料で橋を製作しなければならぬが、デザイン・工夫・プレゼンは生徒が自分たちのアイデアを盛り込める。強度試験も生徒達自身が行う。英語でコミュニケーションをとり、技術的な課題を乗り越えるプログラムです。

台湾では同志社と関係のある淡江高級中学と交流しています。

2013年には、筆者が淡江高級中学にて、建築関係で定番の「折板構造」をケント紙で製作するという体験型授業を行いました。翌年、淡江高級中学の教師が同志社中学に來校した際、LEGOロボットプログラミングの授業を実践し、生徒同士も授業交流を共に行っていました。

他、インド、ベトナム、フィリピン、中国なども筆者が現地で授業を行ってはいますが、それ以上の交流はできていません。将来の交流実践の基盤を固めつつある現状と言えます。

今後展開しようと計画している活動は、ロボットコンテストです。それは近年ますます脚光を浴びており、技術力を真剣に競い合うようなかなり高度な課題設定の大会から、初心者層の獲得をターゲットにした比較的易しい課題設定の大会まで、対象年齢も含めかなり幅広いコンテストが存在しています。近年の中学技術科でメインとなっているこの類の事柄が、国際交流において非常に有効だと感じています。

3. 年齢・立場を超えてアイデアをシェア

「未来の授業に国境はない」

将来的には、今年度よりアジアの国々の生徒達や教師に技術科に集合していただき、ロボットプログラミングや技術的課題を協力して乗り越える授業など、STEM関係を中心とした国際交流プログラムを考えています。今年度は、香港から生徒たちが來校し、国際ロボットコンテストを予定しています。設定される課題に対して最適な解を共同作業でアプローチしていく



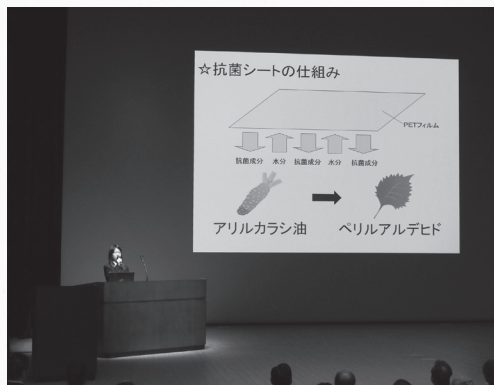
マシュマロ・チャレンジの国際交流授業。同志社中学校にてキムジンヌ氏が共同で授業を実施。生徒も日本人と韓国人が班になって取り組む。(2016年1月)

科学・技術の手ほどきの体験を提供したいと考えてのことです。アジア諸国の生徒達と「科学」「技術」「ものづくり」をテーマにして教育活動を展開する中で、本校生徒だけでなくアジアの子どもたちにも刺激を与え、国際的に協力して課題を解決していく力を養うことを目指したいものです。

本取組は、個別助成(2015年度)、プログラム助成(2016年度)など中谷医工計測技術振興財団の助成によるところが大きいです。

参考文献

- 1) 米国家情報会議編集、谷町真珠翻訳…2030年世界はこう変わるアメリカ情報機関が分析した「17年後の未来」、講談社、2013年4月19日
- 2) 拙稿「中学校の授業で実施した「ブリッジコンテスト」、土木学会誌、Vol.85, No.3, pp.47-49, 2000.



堀江彩美さん 寝屋川アルカスホールにて



塩井研究室にて



高橋詩織さん グランフロント大阪にて

して大葉のエキスを抽出して抗菌シートを作るというアイデアを発表した。現在は大学理工学部の塩井章久教授にご協力いただき商品化に向けて研究を始めたところである。

一方、「未来の仕事を考える」は、グランフロント大阪の核部門であるナレッジキャピタルが主催するコンテストで、中学3年生の関井鈴奈さんが中学生部門で優秀賞（4位2, 574人中）、高校2年生の高橋詩織さんがグランプリ（1, 051人中1位）を獲得した。高橋さんは、国際NGO法人が提起した「地球幸福度指数（HPI）」を指標に、地球に優しく、かつ人々が幸福に暮らすには何が必要かを明らかにし、今後日本が目指すべき方向性を示した。そして自分は将来国連やOE

CDなど国際的に活躍する人物になって、この考えを広めていきたいと締めくくった。審査結果発表では、「自分の主張を述べるにあたり、データを提示して客観的・論理的に発表を進める様子にプレゼン力の高さを感じた。なによりも、プレゼン時の高橋さんのキラキラした笑顔は、観客を大いに惹きつけた。HPIを人々の幸福度、ひいては国の豊かさの指標にと訴えるメッセージも心に響いた。」と高い評価を得た。

受験勉強にとらわれることのない大学系列校だからこそ、このように様々な体験学習に取り組むことができる。これらの体験が大学や社会に出た時に活かされると信じて、今後も続けていきたいと考えている。

少子高齢化やグローバル化の進展など、社会の変化に対応するために文部科学省も重い腰を上げ、2020年に大幅な大学入試改革を行うことになった。従来の暗記中心の学習活動では、知識や技能を活用する力を育成することができないからである。そこで初等・中等教育においても、アクティブラーニングやキャリア教育が求められるようになった。

本校は大学系列校の特徴を活かして、50年ほど前からフィールドワークや修学旅行でのグループ行動など体験を重視する学習を取り入れてきた。近年では中学1年生の「海外旅行の企画を売り込もう!」といったプロジェクト型学習にも力を入れているが、今回紹介するのは、「ビジネスアイデアを考えよう!」と「未来の仕事を考える」である。

「ビジネスアイデアを考えよう!」は夏休みの課題として企画書を作成し、2学期に相互評価やプレゼン大会を行ったうえで、寝屋川市が主催する「ワガヤネガワビジネスプランコンテスト2016」に応募した。主に大学生がエントリーしているこのコンテストにおいて、本校の中学3年生がグランプリ

りと工業部門特別賞に輝いた。その他入選者の半数は本校の中高生だったので主催者側も驚いていた。グランプリを受賞した堀江彩美さんは、寝屋川市の特産品である大葉の2〜3割が規格外で廃棄処分になっていることを生産農家の方から聞いて、有効活用する方法と



堀江彩美さん（右）と工業部門特別賞の飯澤寧々さん（左）

同志社 クローズ・アップ

同志社香里のPBL （プロジェクト型学習）

香里中学校・高等学校教諭

藤井宏樹
ふじい ひろき

「数学1泊研修会の取り組み」 ～高1WR数学の試み～

女子中学校・高等学校教諭 中村久美子

1. はじめに

本校のワイルド・ローヴァーコース（WRコース）の1期生が2006年度に高校に入学して以来、数学科では、より効果的な授業を展開できるよう、少しずつ工夫を重ねてきた。現行のカリキュラムでは高2までに数学Ⅲの内容を終え、高3では受験用問題集を用いた演習を中心に授業を行っている。公式の丸暗記や解法のテクニクに偏るのではなく、数学における基本的な概念や原理・法則を深く理解させることを目指している。数学的な考え方をしっかりと身に付け、確かな学力につなげることができればと考えている。

2. 数学1泊研修会の取り組み

高1WRコースで扱う内容は高校数学の大切な土台となるため、高1で学んだ事柄を振り返る機会が必要であると考え、本校数学科教員による1泊研修会を実施することになった。場所は、豊かな自然のなかで環境問題を考えながらクラスの親睦も

深めることのできる、三重県の「伊賀の里手作りもくもくファーム」と決めた。実施時期については、高校入学後の1年間の学習内容を取り上げられるよう3月下旬とし、1泊2日のプログラムで希望制により2008年度から実施している。

3. 数学1泊研修会の実際

これまで合計8回の研修会を実施し、平均すると在籍生徒のうち約4分の3の生徒が参加している。2015年度は44人中37人の生徒が参加し、充実した研修会となった。プログラムは以下のように、数学の勉強以外に体験学習や礼拝の時間も設け、生徒同士が豊かな交流を通してお互いに高め合い良い刺激を受けて、自ら学びたいと思える環境となるよう工夫した。

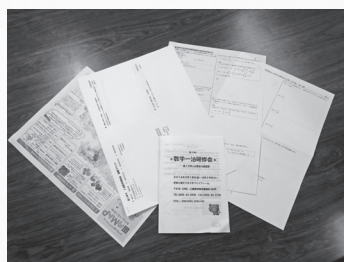
1泊2日のうち数学の授業は合計で5時間半の枠を設け、その他に各部屋で自習することも奨励している。また、グループで数学の問題に取り組み、正答数を競う企画も行っている。取り扱う問題については難問を避け、見逃してしまいそうな根本的な事項を再確認できる内容とした。具体的には、展開と因数

9:20	南グラウンド集合
9:30	学校出発 バス
11:00	モクモクファーム到着
11:20	ビュッフェで早目の昼食(PaPaビアレストラン)
13:00～14:30	体験学習(手づくり教室C館)パン作り
15:00～17:00	数学の授業①(研修室B) その後、自習、散策、温泉など (野天もくもくの湯 3月はレモンの湯 入浴料400円)
18:00	バーベキュー (バーベキューレストラン)
19:30～21:30	数学の授業②(研修室B)
21:30	タ礼拝
22:00	コテージで自習、就寝 (早朝からお仕事があるので早く寝ましょう☆)
6:00	起床
6:30	朝のひと仕事 (ジャージー牧場) (乳搾り・農業体験・しいたけ収穫など)
7:30	バイキングの朝食(PaPaビアレストラン) その後、部屋片付けなどを済ませて全ての荷物をもって研修室Bへ
9:20～10:50	数学の授業③(研修室B)
10:50～11:00	諸連絡
11:00～13:20	買い物・昼食 (モクモクファーム内 昼食代は各自で払う)
13:30	モクモク出発
15:00頃	学校到着 解散

合いながら勉強するという経験は大変貴重なものであると言える。本校には宿泊行事は数多くあるが、勉強を目的とした行事はこの数学1泊研修会のみである。取り上げることのできた学習内容は限られており、生徒のニーズをすべて満たすことができたとは言いがたいが、勉強あるいは数学を学ぶことへの動機づけという意味ではそれなりに効果はあるのではないかと考える。参加した生徒からは、「2年生になる前に、わからなかった箇所を見直すことができて良かった」「勘違いして理解していたことに気がついた」「みんなよく頑張っていることがわかって、いい刺激になった」「のんびりした環境で心が軽くなった」「楽しかった」「勉強以外のこともいろいろ考えられて良かった」「来年も数学1泊研修会を実施して欲しい」などの感想が寄せられた。今後も、若干の改良を加えながら、参加する生徒にとってより良い企画となるよう、取り組んでいきたい。

4. 研修会その後

1泊だけの企画だが、寝食を共にするなかで、友人と励まし



研修会にて使用したプリント



研修会授業風景